



沖縄キリスト教平和研究所

ニュースレター 第5号 2016年8月

巻頭言

所長 大城 実

最近の社会情勢、狂っているのではないだろうか。特に憲法をめぐる政憲の動きが気になる。先の参議院選挙で自民党は改憲動議に必要な三分の二の議員数を獲得してしまった。集団的自衛権の法制化も安倍政権は強行採決した。憲法改悪への準備を着々と進めているとしか思えない。憲法は国家権力、政府の暴走から国民の権利を守るためのものであるはずだ。それなのに、非常事態法を制定し、国民の自由と平和に生きる権利を奪おうとしている。我が沖縄では、自民党推薦の候補者がことごとく落選し、沖縄での新軍事基地建設案は拒否されたというのに、「辺野古が唯一の選択肢」と繰り返し、中断していた高江及び辺野古の工事を反対する住民を排除して強行している。ウチナンチュには平和に生きる権利はないと言っている。

軍属による沖縄女性暴行、殺人、死体遺棄事件はまだ記憶に新しい。「二度と起こらないように」とは繰り返し言うものの、軍人、軍属、その家族等による事件、事故は後を絶たない。この怒りを、この悲しみをどこに向ければいいのか。

冒頭から不平を並べてしまった。不平の羅列で終わってはならないと思う。そこから何らかの行動、何らかの施策が出てこなければ、とは思っている。平和研究所の課題として具体的に方向性が見出せればと願っている。ご声援、ご教示いただければ感謝です。

十数年前に孫たちの問いに答えた表現がメディアの目に触れて取材を受けた。孫たちの問いは、おじいちゃんの足はなぜ一つしかないのであった。沖縄戦で無くしたことを説明するのに、子供の頃沖縄に「戦争怪獣」が来て足を食べられてしまったとの答えの中の「戦争怪獣」に関心を持ったらしい。自分の戦争体験から、戦争は人を人でなくするとの強い思いから出た表現であった。正常な状態においては人は人であり、戦争を起こすようなことは無い。だから戦争は人を怪獣にするのではなく、何らかの理由で怪獣になった人が戦争をおこす。正常な状態を守ることの大事さを説明したつもりであった。戦争を当たり前だと考える人たちの心を正常に引き戻したい。それが今私たちに求められている課題ではないだろうか。同時に苦しんでいる人を助けようと思う気持ちを大事にし、考えや境遇の違う人と共に生きる努力をする。そこに目を向けたい。

ニュースレター第5号を送ります。長い中断のあったことをお詫びしつつ。

(目次)

巻頭言

本の紹介

「連続講座講演録Ⅱ」

「一軍国少年の沖縄戦とその後」

TEAM 琉球・宮古島

研修

これまでの活動

慈しみとまことは社会

正義と平和は口づなし

まことは地から萌えて

正義は天から注がれます。

(詩編 85:11-12)

学校法人

沖縄キリスト教学院

沖縄キリスト教平和研究所

〒903-0207

沖縄県中頭郡西原町字

翁長 777 番地

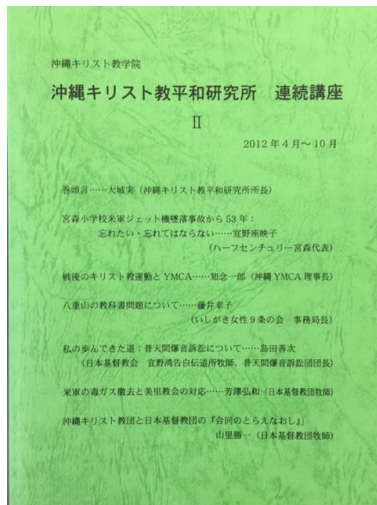
TEL.098-946-1279

FAX.098-946-1312

<http://www.ocjc.ac.jp>

E-mail:ocpi@ocjc.ac.jp

《本の紹介》



一軍国少年の沖縄戦とその後 大城実（沖縄キリスト教平和研究所所長）

《巻頭言より》

山里勝一

○巻頭言

○宮森小学校米軍ジェット機墜落事故から

53年：忘りたい・忘れてはならない

宜野座映子（ハーフセンチュリー宮森代表）

○戦後のキリスト教運動と YMCA

知念一郎（沖縄 YMCA 理事長）

○八重山の教科書問題について

藤井幸子（いしがき女性9条の会事務局
局長）

○私の歩んできた道：普天間爆音訴訟について

島田善次（宜野湾告白伝道所牧師・
普天間爆音訴訟団団長）

○米軍の毒ガス撤去と美里教会の対応

芳澤弘和（日本キリスト教団牧師）

○沖縄キリスト教団と日本基督教団の『合同の とらえなおし』

山里勝一（日本キリスト教団牧師）

（お問い合わせは平和研究所までお願いします）

戦さ世んしまち

みるく世や やがてい

嘆くなよ臣下 命どう宝

「戦世」は終わった

平和な「弥勒世」がやがて来る

嘆くなよお前たち、命こそ宝

尚泰王が東京移住を命じられた時に詠んだとされる琉歌。阿波根昌鴻著『命こそ宝 沖縄戦の心』岩浪書店 49 頁より

「一軍国少年の沖縄戦とその後」のことについて何か書こうとする時、先ず心に浮かんでくることがこの琉歌のことばである。

1944 年 10 月 10 日の空襲（みのるにとって「はじめての本物の戦争」）を経験、サーター屋での被爆、砲弾の破片がみのるの大腿部から向う脛に抜けるような大怪我をしたことが手の感触でわかった後、激烈な痛みに苦しめられ「死ぬ事」を真剣に考えた 10 歳の少年は云っている。常備の「猫いらず」を親子三人で飲んで死ぬ事を母親の順子さんに迫った。全く異常である。それが見た事の

ないお父さんの所へ行こうと言い張ったのだ。揺れ動く順子さんの心を支えたのは、姉さんが「明日まで待って。明日になれば『友軍が来る』』ということばであったという。

凄惨な戦場を抜け出して、即ちみのるが被弾し大怪我をした糸洲、小波蔵のサーターヤーを抜け出したものの、傷の痛みには堪えかねている大城実には母順子さんは「代われるものなら代わって」あげたいと泣き声で語り続けられたとき、大城実はいや母ちゃんではダメだ。母ちゃんが怪我をしたら誰が子どもたちの面倒を見るか。姉ちゃんが身代わりになればよかった」と10歳の子どもらしく言ったとのこと。

70年を経た今日でもあの情景を鮮明に記憶していて、その言葉が姉・榮子さんの耳にも届いたはずで、姉さんがどれほど心を痛められたことか、申し訳ないとの姉さんへの謝罪の気持ちを記している。大城実牧師のキリスト者としてキリストの愛に包まれた者として人間性、「隣人を自分のように愛する」お姿がそこにはある。

その優しさと愛で取るに足りない山里と「クビチリドゥシ」(血を分けた兄弟のような)同志(ドゥシ=友人)となって下さった。山里とプライベートでも公でも1961年に初めて Drew 神学校の寮で(メソジスト教会の Overseas Pastors Training Course で米国に行く機会が与えられて)出会って以来、今日まで主にある兄弟としての交わりをいただいている。

1969年2月25日、沖縄キリスト教団と日本基督教団との教会合同の式典が執り行なわれた。その合同の「火つけ役」を果たした私は、その年の9月、教団の在外教師として南米ボリビアへ旅立ち、1974年まで教会合同のアフターケアに当たらなかったことを教区の皆さん、特に大城実牧師にお詫びしたいと思う。

その後教区三役に選ばれた時も副議長としてだけではなく、山里のブレインとして全力で支えていただき大役を果たすよう力を貸して下さいました。牧師を引退した今日にいたるまで、私や私の家族と「共に生きる喜びも悲しみ」も分かち合って下さることを感謝している。

私は「一軍国少年の沖縄戦とその後」を読み終えて次のことを提案したい。劇作家の手に委ねてシナリオを書いてもらい劇化すれば、読んだ人たち、観た人たちが「平和を作り出す人」となり、あのサーターヤーでの被弾事件が大城実先生の戦場体験のトラウマとしてではなく、みのるが野戦病院で出会った Jim Denson さんのことば「カミサマヒトツクッタ。センソウイケナイ。クニトクニセンソウ。ヒトハミナナカヨシ」との信仰を全ての人に伝えるよろこびの証しになる事を願っている。平和研究所の所長としてよき働きを展開なさいますように祈っています。

(本のお問い合わせは平和研究所までお願いします)

この本をもとにして、本学宗教部が学生、教職員に参加を呼びかけて「戦世に生きて」と題し、朗読劇にすることになった。

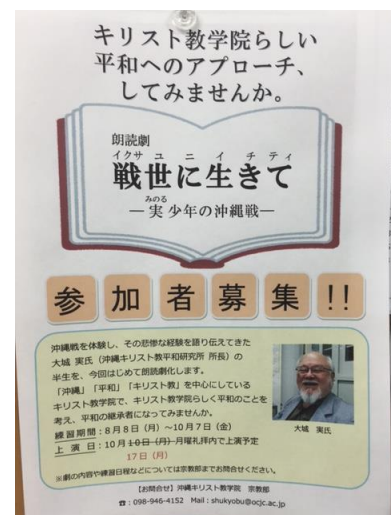
上演日：10月17日(月)月曜礼拝内で上演予定

練習期間：8月8日(月)～10月7日(金)

問い合わせ先：沖縄キリスト教学院宗教部

電話：098-946-4152

Mail: shukyobu@ocjc.ac.jp



宮古島の戦跡をめぐる平和研修 2016 年 3 月 30 日～4 月 1 日

沖縄キリスト教平和研究所の学生活動「TEAM 琉球」では、沖縄島や伊江島での戦跡フィールドワークを行ってきたが、今回初めて宮古島を訪れ、宮古島における沖縄戦を学ぶことができた。

宮古島では地上戦がなかったため、関心が向けられることが少ないようだが、空爆、艦砲射撃、飢餓、マラリヤなどによって民間人、兵士に多くの犠牲者を出している。

平和の礎には宮古地区の犠牲者 3,300 人余りが刻銘されているが、そのうち兵士は 1,500 人だから、民間人は同数以上だがその実数はまだ判明していないという。

今回の研修では宮古島市教育委員会にお世話になった。特に久貝弥嗣氏が初日のガイドをして下さり、私たちだけではたどり着けない場所を丁寧に案内して下さいました。

以下、参加学生による報告。

《国仲梨月、森本彩》

はいたーい

30 日から 4 月 1 日まで宮古島研修でした！
例年は伊江島ですが、今年は宮古島でしたー！初です！

普段は本島でフィールドワークをしている私たちですが、この研修が他の地域にも目を向けるきっかけになったと思います。

そして去年の夏休みにあった学び合いの参加者 2 名も来てくれました。久しぶりの再会に感動。

それでは 1 日目の報告をします。
宮古島に着いてお昼を食べたあと、宮古島市教育委員会の方に下記の 4 箇所をガイドして頂きました。

- ・陣没せる軍役動物を吊ふ碑（じんぼつせるぐんえきどうぶつをとむらうひ）
- ・下里添の野戦重火器秘匿壕群（しもさとぞえのやせんじゅうかきひとくごうぐん）
- ・御真影奉護壕
- ・宮古島市陸軍宮古島飛行場戦闘指揮所跡

まず初めに戦争時の宮古島の状況について説明します。1944 年 5 月、沖縄戦に備えて宮古島に日本軍が入ってきました。当時 5 万人の住民に対し 3 万人の軍人が駐屯。司令部は標高 108m の野原岳（のぼるだけ）に司令部が置かれました。宮古では直接の戦闘は起こりませんでしたが、連日の空襲、食料不足による餓死、マラリアなどで大勢の人々が亡くなりました。あと 1 年戦争が続いていたら宮古は全滅していただろうと言われているほど悲惨な状況でした。

では 1 日目に勉強したところについて紹介します。

陣没せる軍役動物を吊ふ碑（じんぼつせるぐんえきどうぶつをとむらうひ）は、戦時中に使われ負傷した馬を追悼する碑です。当時は人よりも馬のほうが存在価値が高いとされ、とても大事にされました。



下里添の野戦重火器秘匿壕群（しもさとぞえのやせんじゅうかきひとくごうぐん）は 4 つの壕跡から構成されています。現在は入り口がコンクリートでふさがれているため中まで行くことができません。戦後納見中将の命によって納骨堂へ改修されています。



御真影奉護壕は 1944 年の 10 月 10 日の空襲によって御真影の安全について都支所、軍当局との協議の結果ここに置かれることが決定しました。私たちが行ったときは御真影を安置していたとされる窪みを見ることができました。



宮古島市陸軍宮古島飛行場戦闘指揮所跡は鉄筋コンクリート造りの壕です。この壕が作られた目的は宮古島での地上戦の激化に備えて作られました。研修のあとは宮古島教会でお話を聞きました。宮古島に自衛隊を設備しようとしている話、それゆえに出る被害についてお話していただきました。

そして夜は BBQ をしました！！

お酒を飲んだり、お肉を食べたりとチーム琉球らしく楽しく過ごしました。



宮古島市議の上里樹氏と尾毛佳靖子牧師から、自衛隊ミサイル部隊配備の問題性について伺う



憲法 9 条が掲示されている宮古島伝道所

はいたい、みなさん

宮古島研修二日目は。内容が盛り沢山です

- ・パイナガマビーチの銃眼跡
- ・トゥリバー特攻艇秘匿壕
- ・荷川取海岸特攻艇秘匿壕(とっこうていひとくごう)
- ・海上挺身隊慰霊碑(かいじょうていしんたい)
- ・ピンフ嶺野戦重火砲壕跡(やせんじゅうかほうごうあと)
- ・アリランの碑
- ・久松五勇士顕彰碑
- ・伊良部島～下地島

二日目は宮古島に残る沖縄戦の跡を中心に、観光だけで訪れたらきっと気付かないような場所ばかりを回りました。

特に、「パイナガマビーチ」はとても綺麗なビーチで、それだけで宮古島に来てよかった～と思う程でしたが、端の岩影には銃眼の跡があり、ここから上陸する海軍を狙う予定だったということでした。その銃眼跡の前に立って海を見ると少しだけ当時の状況が浮かんできて、綺麗な海をまた違う視点で見ることができました。

また今回は二ヶ所「特攻艇秘匿壕」にも訪れましたが。。そもそも特攻艇とは一体何ぞや？
特攻艇は、一人乗り用の小船で当時は、操縦席の後ろには 200kg の爆雷を積んでいたとのこと。また、秘匿壕と言われているようにその小船を隠していたと言われているが、米軍からは「Bort yard」と呼ばれていたらしく、ここに小船が隠れていることはバレていたのではないかとされています。しかし、普通に歩いていると中々気付かないので是非探してみてください。



そして、次に訪れたのは「アリランの碑」です。この碑は日本軍慰安婦であった朝鮮人女性らを記憶するために建てた慰霊碑です。驚くことに 12 もの言語で碑文が書かれていて、それは、日本軍によって被害を受けた女性の故郷の 11 の言語と、今も続く女性への戦時性暴力の象徴として、ベトナム戦争時に韓国軍による被害を受けたベトナム女性のためにベトナム語を加え、12 の言語で追悼の碑文を刻んでいるそうです。ルーツを辿ると、国を超えて様々な人がこの戦争に関わることにな

ってしまったという戦争の悲惨さと壮絶さを感じさせられます。また、だからこそこのように形として残し、訪れることが大切なのだと感じます。同じ場所を訪れても何を考えるかで、感じるものも違うかもしれません。



お昼ごはんは、手作り豆腐が有名な「春おばあ」のお店で食べました。ゆし豆腐やそばが本当に絶品で、みんなで和気あいあいとおしゃべりしながらオフの時間を楽しみました。

その後は「伊良部大橋」を渡って伊良部島、平良島を訪れ綺麗なビーチを目の前にみんなで大はしゃぎ～～！！こんな風にみんなと楽しめる時間もとても幸せなことなんだとこの研修を通して改めて感じます。本当に学びあり、楽しみありの充実した時間でした。

《玉城里奈》

はいたい。

宮古島研修三日目は、玉城里奈が報告します。

(うへのドイツ村、東平安名崎、来間島)の3箇所に行ってきました！初日、二日目とは違い、宮古島の発展、開発の努力を感じる1日でした。

最初に東平安名崎に行きました！

主にうちなーぐちで、東のことを「あがり（太陽が上がる）」と呼ぶことから、「あがりへんなざき」とも読みます。また、宮古島の言葉では「あがりぴやうなざき」と呼ばれています。景色がとても最高でした。

そして、次にドイツ村。宮古島にドイツ？？！

とびっくりすると思いますが、昔から深い関係性があるんです！

この施設が出来たいきさつからお話すると、1873年にドイツの商船が台風にあって上野宮国沖で座礁してしまった事が発端です。

このとき住民が献身的に救助して、その後も手厚く看護。のち無事にドイツに送り帰したという事件が、当時のドイツ皇帝ウィルヘルム1世が感謝して当地に博愛記念碑を建てたという事が有りました。



この事を後世に伝えるため 1987年にドイツ村の構想ができ、1992年に着工し1996年に完成しました。総費用は約48億円。宮古では最大規模のテーマパークで、敷地内にはホテルやビーチを初め、色々な施設がそろっています。ドイツビールや、中世の衣装も着てお城を回ることができる衣装体験コーナーもあります。宮古島でいろんなドイツを体験することができます。

2000年には沖縄における九州・沖縄サミット会議に出席したゲアハルト・シュレーダー前ドイツ首相も訪れるなど、日独の文化交流の拠点として知名度を上げてきています。

最後の来間島は、宮古島から来間大橋をわたっていきました。日本屈指の美しさを誇る与那覇前浜ビーチと来間島を結ぶこの来間大橋の長さは約1.7km。両方、綺麗な海の景色に囲まれながら走る車は、まさに亀の甲羅にのって、竜宮城に向かっている気分になります。というのも、来間島についてすぐにいったのがある展望台。

目の前に与那覇前浜の真っ白な砂浜と、コバルトブルーからエメラルドグリーンへのグラデーションの海を望む展望台。来間大橋も一望でき、ダイナミックに宮古島と来間島の海の美しさを楽しむことができます。なんと竜宮城というネーミング。どこから来たものかは謎ですが、来間島を訪れた際にはぜひこの景色を楽しめることをオススメします。

その隣には、展望台のそばにあるカフェ。甘さたっぷりの宮古島のマンゴーを使ったパフェやスイーツが人気ですが、カレーや宮古牛を使った食事メニューも充実しています。来間島散策の休憩タイムにどうぞ。食べ物から、洋服、小物まで揃うお土産屋も併設されています。

また、新美しいまちづくり地域事業もおこなっており、来間島憲法というものがあります。8条まであります。おもしろいもので、屋敷内に必ず花を植えるという決まりもあります。ハイビスカスやブーゲンビリアです。町全体で意識を高め、すみたいまちをつくりあげていることはとても素敵なことだと感動しました。

わたしは、那覇に帰って、自分の市民憲章も偶然知る機会があり、自分のまちについても、考えさせられる旅、最高でした。

宮古島について知らないことがたくさんあり、今抱えてる問題、それを解決していく前向きな住民たち、熱いうちな一んちゅ魂に感動しました。この三日間を通してひとりひとりが'わたしにできる平和活動'を考えるきっかけになりました。



参加は11名であった

【これまでの活動】

《2014 年度 講演会・連続講座Ⅲ》

6 月 20 日(金) 憲法講演会

「沖縄における人権～憲法・基地・平和」

講師：永吉盛元氏(弁護士)

10 月 14 日(火)「當山正堅の光と影」

講師：川平朝清氏(昭和女子大学副理事長)

11 月 11 日(火)「照屋寛範牧師の思想と足跡」

講師：饒平名長秀氏(神愛バプテスト教会牧師)

1 月 20 日(火)「戦後の教会体験」

講師：神山繁實氏(本学理事長)

○知念優幸君・全国一人旅支援

TEAM 琉球の知念君が 2014 年度に一年間、全国を一人旅し沖縄の状況を講演してきた。

○近江兄弟社学園中学 修学旅行生への講演と戦跡ガイド 2 月 11 日(水)

チャペルで大城所長の講演

TEAM 琉球の学生 10 名による戦跡ガイド

○大谷大学(京都)の福島ゼミ研修 2 月 17 日(火)

TEAM 琉球の学生 4 名による戦跡・基地ガイドと交流

○TEAM 琉球・伊江島研修 3 月 19 日～21 日

○キリスト教を土台として沖縄・長崎・広島から平和を考える学び合い 9 月 8 日～13 日

《2015 年度 講演会・連続講座Ⅳ》

6 月 25 日(木) 特別講演会

「基地のない沖縄を目指す宗教者の集い」

講師：谷大二(カトリック沖縄教区司祭)

7 月 21 日(火) 特別講演会

「一神教から見る現代世界：ユダヤ教、キリスト教、イスラーム」

講師：加藤哲平(特別研究員)

7 月 23 日(木) 加藤哲平氏によるワークショップ

「日本人とユダヤ人・流氓ユダヤ、杉原千畝、小辻節三」

10 月 23 日(金)特別講演会

「明治以降、敗戦までの日本政府の宗教政策」

講師：岡田弘隆氏(真言宗長谷寺住職)

6 月 9 日(火)「戦後の政党政治史」

講師：仲本安一氏(元沖縄社会大衆党委員長)

7 月 28 日(火)「1960 年～1970 年代の沖縄における教会の平和活動」①

講師：平良修氏(沖縄キリスト教短大元学長)

8 月 11 日(火)「沖縄・琉球と仏教」

① 仏教・浄土真宗って何だろう～信心と習俗」

講師：長谷暢氏(東本願寺沖縄別院僧侶)

9 月 10 日(木)、17 日(木)、24 日(木) 計 3 回

「戦後の社会福祉概観～島マスの働きと島マス記念塾の歩みを中心に～」

講師：名嘉隆一氏(愛隣園理事長)

10 月 6 日(火)「沖縄における教会の平和活動」②

講師：平良修氏

10 月 13 日(火)「仏教の興隆と衰退」

講師：長谷暢氏(東本願寺沖縄別院僧侶)

11 月 10 日(火)「琉球における浄土真宗の歴史」

講師：長谷暢氏(東本願寺沖縄別院僧侶)

11 月 23 日(金)特別講演会

「和解と平和構築」

講師：佐々木和之氏(ルワンダ PIASS 大学教員)
石原明子氏(熊本大学准教授)

○キリスト教を土台として沖縄・長崎・広島から平和を考える学び合い 8 月 31 日～9 月 3 日

○近江兄弟社学園中学 修学旅行生への講演と戦跡ガイド 2 月 10 日(水)

チャペルで大城所長の講演

TEAM 琉球の学生 10 名による戦跡ガイド

○TEAM 琉球・宮古島研修 3 月 30 日～4 月 1 日

《2016 年度 講演会・連続講座Ⅴ》

6 月 17 日(金)慰霊の日特別講演会

「一軍国少年の沖縄戦とその後」

講師：大城実所長

7 月 19 日(火)「集団自決を心に刻んで」

講師：金城重明氏(本学名誉教授)